

911.3
7

月
之
沙

月之沙

師竹菴吾山編

月之沙の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて

此巻の巻ありて



十分の春とわされい江海の月と
うかた満のし清くも又十分の
秋ととあきしまた月夕の二葉と
二葉をうきうきと編集のうき
とわらうそなかりる今やささうんにて
うの流去る流と枝川ありわらわれ
とと源平のうきあきと那葉
鳥乃心の友ありと自他親疎をうき

てんきつと孫て板のうきせゆると
むき師の風流をうきとうきと
うきにうきうきの海と徳と物あり

輕舟序

潮隨月乎月隨潮乎月与潮
相從不容言也由是觀之隨
月運行亦明矣謂之進退者
法以為候也其相隨之形破之
猶如拿月輪轡也潮雷也必
不外是余久持是說而莫敢

此說與前不同
其說與前不同
其說與前不同

應者近越谷吾山載傘行天
下取近世以來佳句警言什去
于四簷以慰長途之中雅士
剪錦裁綺益增其光津以
爲師計盈量虛切精其候
者謂于之珠滿之珠復生于

今可也雖不親行載傘功亦
不作乎哉

東海釣翁撰



東江書



不...
今日...
...
...

...



秋 天 东 海 月

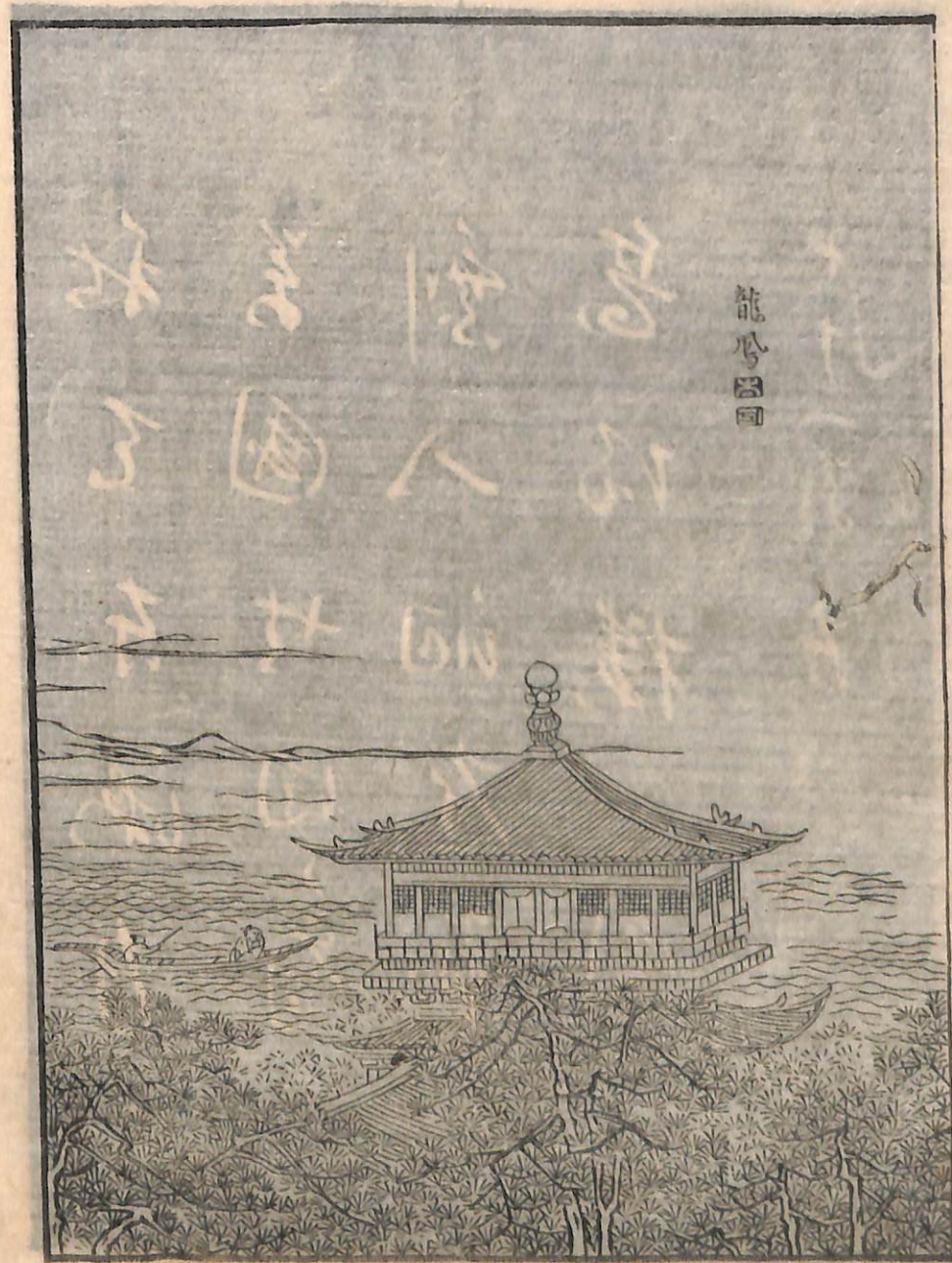
美 国 共 同 看

梨 入 洞 庭 画

岳 阳 楼 上 图

七十二翁 东 溪







月と波卷之天

三五夜月

けしきもなほなほ月身亦

沖寂

題月

池のほとり

海葉の花は波を以て巻乃月

世音

あまの魚は陸のかほは月

龜章

あまの魚は目之光を以て

伊丈

入おを又あけはあはれ月

柳宇

三まゝよ身をうらふる水かたき

昔はてまを河うけりよの月

ちの菊よ其まのてりや月二水

六月でちの調まはあをうら

美くうらあはまるまやあゆ月

月の中月の世まあるおの由

落葉を移ふふありは秋の月

十五水あ出十月うら十三夜

輕舟

一帆

湖大

薰風

千町

此君

百卷

水唐をまきく玉とすよの月

柳のををのり色あま十三夜

や一はし瓢ははつ十三夜

面壁の澤もてくく月えふ

幸ふ流月をくくくよ花かきし

いとされおの要やうよ若月

ゆれこれう晴ぬきさの月えふ

めはししの田うらあうらあ月

春人

藤幸

寒光

存可

東羽

鶯言

機管

宣我

翠花
菱花

良水蝕なりり九

清うつふも内々もうちこきよの月
丹花

それ新引きと起せりよの月
野梅

明月の圓の流りよのまを記
古月

清出れおりのほりよの月
子徳

福原よのほりよのまを記
尾言

おしり月吹おれ流流島
湖十

晋窗

おそよほり信しり月今言
千路

むのちん枝を望むおのり月
厄言

おつちのあまほちり月
吾嶺

うへに流ハまよのまを記の月
珪組

月おのり流よのまを記の月
蓑笠

石山のおおしりまの秋言月
調笛

我尾と雲のしり出る月よのま
東秀

名月よ高とまを記の竹枕
百壽

福江を水も近江も幸ふの月
 名目を雀と採ぬる毎の音
 物ほお批の箱よりよる月
 名月とちを交けしめ揚うけ
 三日月と橋と春を吐く
 名月と木の音は花の如き山
 酒宴と茶のいとおぼし門の月
 夏まつふあつふ起り月流る

和橋
 姑山
 秋色
 佳夕
 九包
 吾珪
 至丸
 小好

女

心寺と空を六社と秋の月
 笛乃音もふく此の月
 おもひ打ち飛んぬる月
 名月と雲のせうの戸を
 名月と藤の道とやまの月
 思はし時を拾は月とて
 名月と雲のまを流柳の月
 歌ちとて雲のまを流柳の月

笑尺
 祇雀
 蟻城
 角之
 其帳
 芳喬
 秀里
 杉風

借

唐詩子抄
池の月
おのれ
半橋
山吹
日
たけ
ま

卧猪
菊人
涼山
花光
紀南
吾中
恭川
星芝

女

十
水
北
亦
花
嫁
志
九

花狂
千水
吾秋
吾言
百馬
扇成
女洗
母童

さうせしれんて挽くはよ治をわして
あつてし海をわく十三日の月を

きぬうけく妹あつてしと橋の月

知足

文とあつてその賞はつと月令を

北川

けれのこつ子の花と十三日

雀子

三日月のちいさきとちう山

以一

濃くくつと接するもしちりあつと

羅文

そつれ知とい木のるしと来ては月の

文篁

明星と二水の月おちるはつれ

叶秋

うハ澄の苗と清水と月

未英

名月と水の志はつと竹とつと

山帯

名月と地をよき華陰の木の影

都友

あつてその神おぬおつと月

路榮

ふみ海とさつとつとつと二月

菜山

番屋のむしと流るるおちる月

魚行

すけうらわのぼくおちる月の月

百輪

あつてそのはみ流るる月の月

玄々

三日月のあはれ魚河十三次
 舟水の河と志流りあり三日の月
 花をさるし心とくしありありの月
 舟月すすし河原と却人
 ようこれハ梅まこまし一せめと
 名もこのハ漕ぬ片も掉
 右月と遠くて逃ぶ暮まの心
 桜欄の紫法おるこころをな月
 風雀
 帆石
 湖舟
 半秋
 月結
 百長
 長眉
 芋月

斤里と楮のふく後若月
 せう海のかみ掉りし三日の月
 月あはれ心の紫をこぼれ松
 川持を逃る流りこころの月
 ちんまをし懸をておきて初月
 庭をたれ舟の境をこころの月
 迷子呼は痛あはれこころの月
 湖をうれ入るこころの月
 春城
 芳柳
 かつこ
 其楓
 梅言
 吾朋
 門意
 霜後

女小沢
 八王子

下徳宗道

千住

さむしりよききくさく後の月

榮督

澄みぢれ空の月己の二方極

吾千

名月やみ蘭のふもある極乃先

竹塚 賀梅

京の戸乃更とて玉形一月の友

栗原 東子

吹雪を令えは多しとてりよの月

セナキ 良霸

此の水や月漬めをさしひやの

浮ッ方 祇敬

ハ系を丸めとてさく三すあ月

州加 戸蝨

音くよまつ魚也月ぬ二日月

綾坡

三日月や座の空くぬ州の居

千加

丸くちるおとちんをさしそり月

十雨

名月や文をね直路松一本

龜游

能也れ体さうはて新月

冬松

心もも花をさしそりあ月

文壽

梅も香ありはさうりそり新月

蒲生 文峰

昔もさうり風もさうりそりあ月

仙里

名月の水砕くや水訓掉

湖水

若月ついで七つはを六のちる首
若月や若道の鶴も雲れま
若くや波の結ぶ心孫あまき
文より竹幹なりらあ月
日や向く睡さよ月の影け
若月や日おさげ振ふ村うら
月こころい鶴の首つとそれは
若をちいしとらく丸十三次

吾竹
鯉山
雪後
都江
吾舟
泉涼
江使
鳥山

登戸

七鳥

今月と蘭を友よあま夏月

未田

九貢

定ゆるよ蓋ふと月をく南

東孤

若くは是あはれあるそいとよ

葛西

圖管

飛魚の飛あーりり幸あ月

越谷

一志

若人ああらおとけ月をさ

朝市

生望ふ志こころ月あひうか

吾郷

以こころひり一浪さー然月

鳳更

かかほしし鳥とれそあ月

文柳

ほろくおれ橋廻りそよ月よみ
て井のぬきこ遊ひやうらめ月
あつたこころをさくわのふたうそ
谷月く鶴卵を透に振の先
川丸ふ家の橋こよめら若月
小娘のたよりあけの盆の月
夢さよと神よ海老の月おふ
りれへ月よと口にも定る言

大沢

斗山

西川

飛来

沼津

篤義

島田

雨竹

白ス

以篤

入ノ

里景

舞坂

斗六

阿什

若月や物ささきやわさく遠

采翁

東武のおを

被きぬ女さうさうさきよの月

瀨長

極爲しちうふおほのぬさ

瀨曉

流屏の令言らりて亭の月

古周

一ゆふ月えの燈や此のあき

祇洞

望く様え橋おさけや後の月

賤我

若くさく局のきさく時よほき

菜陽

名月へ燕の奴乃頼りて衆
 来義
 名月へソひ出りてせぬ日如山
 李天
 系二ふ入日を元際やさすの月
 其角
 名月へせりてふりては鶴乃や
 嵐雪
 あひ人の声先よあけおろ月
 芦水
 又ぬらうもそはるよさやの月
 春路
 猿のあちねふありて音の月
 亀童
 あてもなきふらひのさり月を
 不言

春はく清くしんや乃ら月
 白方 二木
 松影を半し是る燕の月を
 三河吉田 古帆
 落結のりほせぬの月見く
 田原 涼水
 月お出く柏まをむる結く
 保美 石意
 月おくし名はをきし十三夜
 免十
 十六おや中の池の連山いより欠
 赤坂 洗忠
 世お怪くわの池や月の法をさ
 法油 冬里
 うねくしや子竹ふら月比
 安房 涼花

山々山ありあいの古やうの月
 流つた山あふきくはひ月
 越るべき八海お川こおろ月
 十三水川田河とよはれせに
 月ほしゆうの笛をほろほ
 海山を目の雲うき月さ
 若由へううれ鳥も三千里
 雲の戸や柳をわくも 就月
 可乙

信州

思可

穠花

胡月

紫草

柯則

花山

笠坊

心も心信まつちうとらら月
 寝むなふ貞やんやうお月
 春の風やと渡を春の月
 夕立や山を流して月おをく
 後回土と水も深しえりも
 道帆もくしを流しとれ月
 象みよ控山おあり三月月
 水をうと古井のそとり月

自徳

吾友

春夕

富竹

布成

梅山

春帯

岸耕

栃木

塞野

鳥山

野井

その月横川お杉の木はるる
若くしてるを思はれ 殿のそ

橋流るるの夢を思え遠はるるの月

月をよめてり思ふに非ざるの月

鷹の山はまゝのこみお月

松まゝの老と持てりお月

えぬものをみればたつたお月

えりごとをもし申すにわら月

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

素由

素江

玉山

如山

相州浦賀

銀甲

若くしてるを思はれ 殿のそ

月をよめてり思ふに非ざるの月

鷹の山はまゝのこみお月

松まゝの老と持てりお月

えぬものをみればたつたお月

えりごとをもし申すにわら月

その月横川お杉の木はるる

者柳

吾涼

文里

吾成

台斗

麥林

柳居

大津

歌仙

若月の中よ已く爰披し

吾山

あゝ青うらうらしれきのおは娘

野梅

だゝおろしほしくほしし鳴連と

伍丈

すゝれとらとよぬくおららり

風雀

むつしよ暮よほろしおろし

柳宇

近川とらと雪車の入知と

古月

挑打をいとしそ丸吹ほと

寒光

三千丈の庭子井戸あま

山

典座のほをいぬうきぬと

梅

暁霞とよきつむをうらひす

宇

涼丸のそらうらくと鳥籠

雀

庭よ油のれ妹のいも

丈

鳥中よ世はるききいり

月

むし流をぬれはれ

光

かすくの湯柳の烟あつてき
月まのつこそり扇の声
左邊のちくはせむかはは
瓶の印工法乾くりまうふ
福くくと馬のほろの町まつき
巨指えまじり勢海の利立
こつまは海にまたうらまは
舟ちあつてまうくお汁系

世音 丹花 菱巻 子德 龜章 山 花 音

河まのちの茶う茶し松は
渡りまのちの勢田のまは
悔急あく十八日おれま
あうらうらう茶の年を
いはまのちの茶のつ茶の古道
降の降のちのちのちの市
ゆるまのちのちのちのちの
まのちのちのちのちのちの

徳 菱 山 章 藤 幸 山 春 人 幸

ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定
ふり推いせの山田乃能言定

山人幸人山
執筆

八月 淡 淡 淡

書中 萬里 流

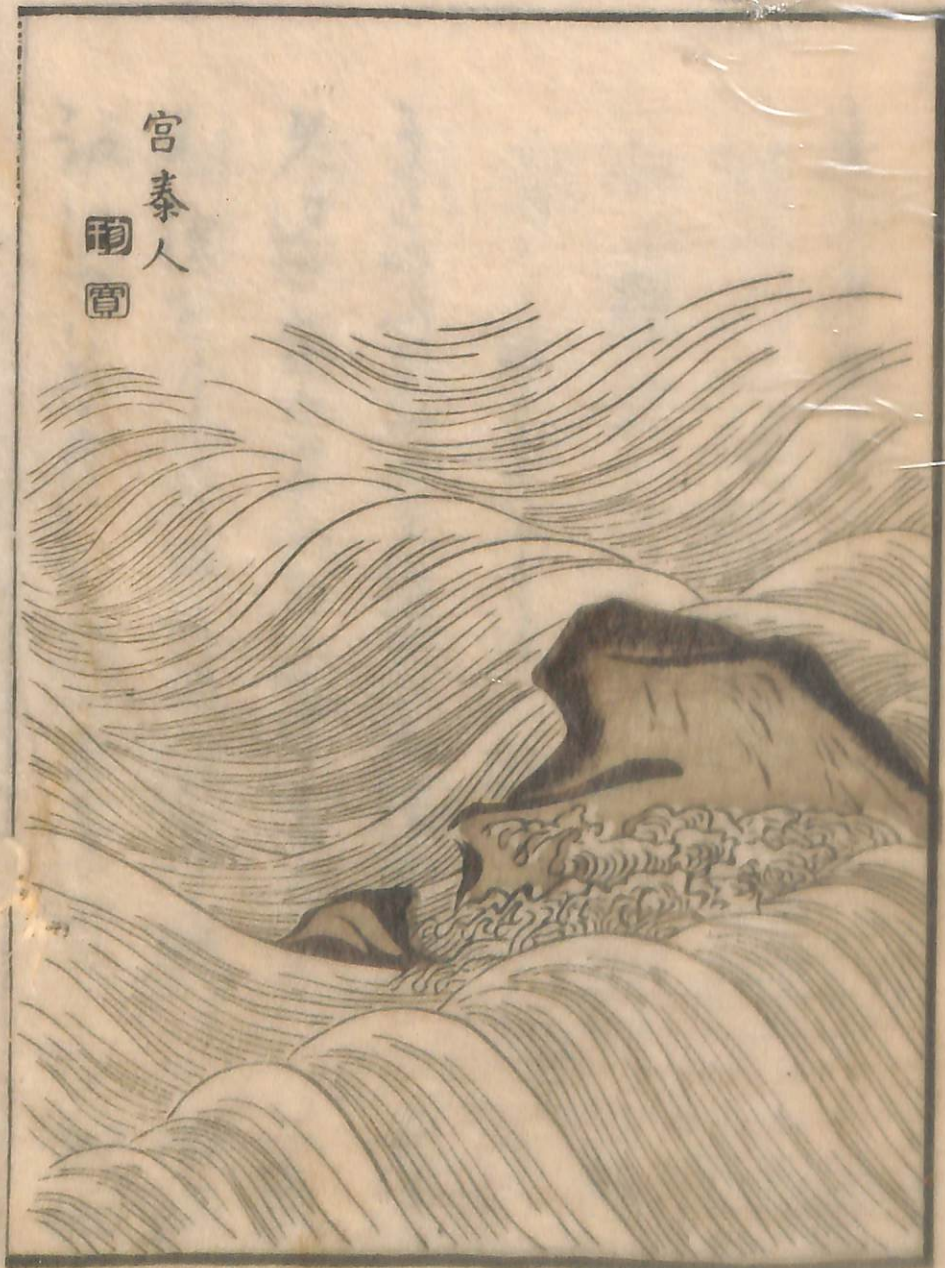
應 正 觀 歎 化

墨 氣 動 年 佳

七十 二 年 東 漢

宮秦人

陶
匱



月と汐卷

題詞

海は舟をこする

うきかきおきしほむ七浦の春

汐は客の宿ふあふ仲多う

毛纏をりよの海帆や汐干写

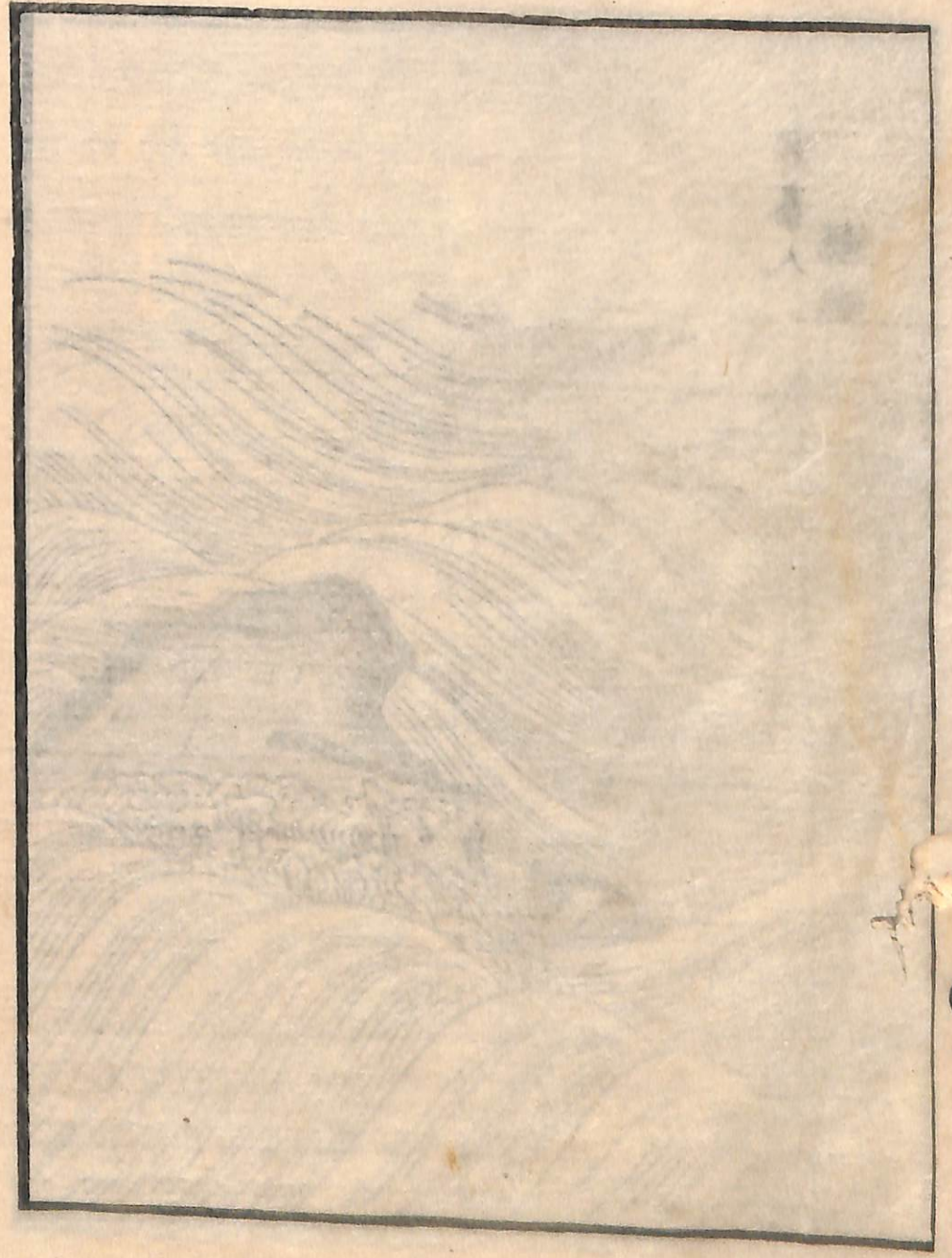
汐は海舟に帆を取返し

芭蕉

其角

乙由

柳居



春人
 世音
 龜章
 野梅
 古月
 存可
 花丈
 本来

菱花
 丹卷
 花晚
 佳少
 ちよ
 太無
 北川
 吾珪

莊子曰藏天下於天下

大海を大海、吾一ほひ、ま

米翁

樽よまゝ、つゝ、龍よあふ、沙干ふ

千鶴

如は、岫の芥、水、流、去、は、奈

薰風

海を、一、ま、つ、ふ、漁、等

輕舟

龜泊、舟の、さ、河、ひ、さ、は、入、江

一帆

毛、月、中、を、一、ま、ら、ふ、流、沙

冬映

岸、ら、ら、さ、は、の、ま、ら、り、し、氷、の、野

温克

如は、つ、就、其、ま、の、所、是、ら

未我

ひ、つ、つ、を、は、れ、ゆ、ふ、柳、の、野

李天

峯、ら、ま、ら、松、引、き、を、就、其、湖

九包

枝、川、山、令、を、葉、月、の、は、の、是

東羽

松、あ、ハ、鳥、を、陰、ふ、一、知、は、い

以一

羽、風、や、沙、干、を、透、ふ、お、ふ、を

圭督

貝、海、の、貝、を、あ、め、や、沙、干、写

尾谷

天、の、陰、ふ、ち、つ、ふ、ふ、や、は、つ、時

鳥醉



ちたはては海濱の松をみかほけし
 任言くし干の釜も田植の如し
 留袖を長くおほしふし干うま
 新言の娘も何そふうーか干持
 早し女の脛もつよこはし干小
 浪浪のいふとも若おぬはし
 吾教くしよ持とれ竹の中
 けし干花をほしよまきこふ

和橋
 鶯谷
 朗苗
 文洗
 路榮
 鳳山
 玄二
 不言

